

「主の道を備えるもの」牧師 鈴木淳一

- ・旧約聖書：イザヤ書第40章1～2節
- ・新約聖書：マルコによる福音書第1章1～8節

「イエスとは誰か」、この問いに皆さんは何と答えるでしょうか。神、救い主、愛の人などあるかもしれませんが。それはその人の信仰の告白になります。異教の地フィリポ・カイサリアでイエス様が「それでは、あなた方はわたしを何者だというのか」とお尋ねになった時、ペトロは「あなたは、メシアです。」と答えました。

またイエス様が十字架で死なれたときに、百人隊長が「本当に、この人は神の子だった」と告白しています。

ここではイエス・キリストが神の子であるということが始めに語られており、それがこの福音書の底流にずっと流れているのです。

イエス・キリストの福音、つまりイエス様が語られた福音であり、イエス様についての福音、つまり出来事である十字架、復活、癒し、愛などを通して、このお方が神の子であることを証しているのです。

では初めには何が記されているのでしょうか。人生の始まりならばその人の生誕でありましょう。

マタイやルカが記しているように。しかしマルコではイエス様は洗礼を受けることが汁記されており、その前に洗礼者ヨハネの登場で始まっているのです。

宣教活動をされた所謂公生涯と呼ばれるお亡くなりになるまでの3年間に集中してマルコは記しているのです。イエス様の公の活動の初めに洗礼を受けることが必然ですが、この備えの業をしたのが洗礼者ヨハネです。

このヨハネについては旧約聖書の預言などが引用されていますが、大分変えられていることに気がつきます。たとえば「あなた」というのは本来イスラエルの民であります。ここではキリストに置き換えられています。これは悪いというわけではなく、かつての信仰者が旧約においてそこにすでにメシヤに関することが預言されていると読み込み、新約における出来事に当てはめているのです。旧約を新約の光に照らして読んでいるのです。「使者」というのも旧約では天使ですが、ここではヨハネのことです。

神様はこのヨハネに、後から来るキリストの道を準備させよう、と言われるのです。ヨハネが活動したのは人が密集する町ではなく、人がいるかいないかわからないくらいの荒野でした。人との距離も遠いので叫ばないと声が届かないのです。荒野で叫ぶ者の声、これこそがヨハネでした。いわば彼は「声」であったのです。

女優が顔であり、学者が頭脳であり、サッカー選手が足であるように、ヨハネは声でした。声という言葉は旧約では音も意味します。(虫の発する音を日本人は声として認識するのが西洋人と脳が異なると言いますが、韓国人のペー牧師もよく虫の音と言います)。

新共同訳聖書では罪を犯して隠れているアダムに神様が近づいて来る時に聞こえたのは「(足)音」です。

しかし新改訳聖書を見るとそこが「(あなたの)声」と訳されています。ドキドキしているアダムに近づいて来るのは足音でしょうか、あるいは神様の声でしょうか。ただ音、声いずれにしてもこれは空気の振動ですのでいくら大きくても必ず収束し、消滅します。そのような儚さがあります。これがヨハネ、荒野で叫ぶ声、の生涯でした。一年を通して私どもキリスト者またそうでない人たちにとってもイエス様の誕生クリスマスは大きな出来事です。これは丁度当時の頃に当たる日の短い寒い時期です(北半球では)。そのような時にこの喜ばしい出来事を祝うということで気持ちも明るくなります。

それに対して丁度夏至の頃はカトリックでは洗礼者ヨハネの日としての祝日があるのです。夏至は日が長く暑い時期です。イエス様の誕生とは正反対のこの日に、ヨハネの歩まれた熱い人生があるような気がします。

ちなみにこれは日本基督教団成立の日として覚えられています。(日本基督教団の歩みがヨハネのようなも

のであるかどうかわかりませんが)。

ではヨハネは何を語って、いや叫んでいたのでしょうか。それは罪の悔い改めのための洗礼を受けるようにということでした。ここで私が注目したのはここで使われている罪というのが複数形であることです。日本語では単数複数区別がないのが弱点ですが、他の欧米外国語では区別されています。つまり数えられる罪です。具体的に意識に上り、悪いことをしてしまったという罪です。

一方罪が単数で使われるような場合、特にパウロのローマの信徒への手紙の5、6章で使われているのは私が調べた限りすべて単数形です。ここでは人が罪に死にキリストに生きるための洗礼についてパウロが語っているところです。単数形では主に数えられない罪です。罪一般もありますが、もっと深い内在する罪をも意味します。ヨハネにおいての罪の悔い改めが、意識にのぼる数えられる罪であったのに対し、キリストにおける洗礼で清められるのが内在する罪であることが言えるのではないのでしょうか。ヨハネは水という見える物素で洗礼を授けました。それに対して後から来るキリストの洗礼は見えない聖霊によるものです。

私どもの受ける、受けた洗礼は水と聖霊によるものです。聖礼典には洗礼の他に聖餐式がありますが、ここにおいても見えるパンとぶどう酒と共にキリストの現臨があり、聖霊による天上のキリストとの交わりがあるのです。聖礼典には見えるものと見えないものの両方が必要です。見えないものを軽んじて精神主義になっても行けないし、見えるものを偶像化してもいけないのです。

先にヨハネは荒野で叫ぶ声だと言いましたが、何よりも彼のなした大きな業はその呼び名の通りイエス様に洗礼を授けたということです。それによってイエス様の公生涯が始まったのですから。ヨハネは言いました「わたしよりも優れた方が、後から来られる。わたしは、かがんでその方の履物のひもを解く値打ちもない。」つまり自分はそのお方の奴隷にも値しないということを告白しているのです。

そのころヨハネはとても人気がありました。彼が洗礼を宣べ伝えていると「ユダヤの全地方とエルサレムの住民は皆」彼のもとに訪れたれたとありますので、ヨハネが今日でいうスターになってもおかしくはなかったはずですが。人はたとえ控えめに見える人でも上手に引き立てられれば喜ぶでしょう。もちろんストレートに自分が主役というのを押し出す人もいます。しかしヨハネは自分の役割を弁えていました。自分が主役になればなれたかもしれませんが、それは神の御心ではないことを悟っていたのです。自分の使命は主の道を備えること、そのわき役に徹することを受け入れていたのです。

彼が荒野で叫ぶ「主の道を備え、その道筋を真っ直ぐにせよ」とは彼自身の使命であったとともに、人々に対しても主の来臨に備えよとのメッセージでした。(因みに「道」という言葉は中国語の聖書では「道路」になっている。ご存じのヨハネによる福音書14章「わたしは道であり、真理であり、命である」の道も同じく「道路」であるのがおもしろいが、日本では「道」と言うと武士道、茶道、華道、柔道を極めるみたいな精神的な意味も強くあり、なんとなく求道精神と結びついて考えることが多い。諸外国にもそれはある程度あるかもしれないが、基本的に人が通る道というのを考えさせられた。前方に瓦礫や藪があれば人は前進しにくい。しかし道が備えられれば進んでゆけるのである。)

主が十字架の道を歩まれるためにエルサレムに入城されたときに上着を敷き棕櫚で迎えた人々は、キリストを張り付けにするのに賛同してしまいました。主の道を備えるとはそのように軽薄になってはいけません。キリストの道を備えるというのは己の深い罪を、それも知ることのできない罪を抱えている哀れな存在を、主の前に投げ出し告白して洗礼を受けることなのです。

ヨハネの荒野で叫ぶ声は確かに空気の振動ですのでしばらくすれば自然に収束して消えてしまいます。

しかしもしその言葉を聞いてその言葉が声が連鎖的に語り継がれるならば、そのヨハネの語った言葉や、キリストの福音は消えてなくなるどころか大きく増幅されることでしょう。実際に2千年たった今日においてもその言葉は世界中に響き渡り続けているのです。私たちも、これから、かつて語られた言葉、声を世に語り伝えていきましょう。